

ピアノ文化の東西比較
コメント

2018年12月16日

小野塚 知 二

はじめに

わたくし自身の個人的な背景

戦後日本のピアノ文化の周辺・辺境からピアノ文化を観察し、「体験」してきた。

「音楽」と「音苦」

才能と好み

I 本間千尋「戦後日本のピアノ文化」について

(1) 図・表の情報の豊かさ

従来、印象批評的に論じられてきたことの実証的な基礎が補強された。

ことに、表2-2と表3-1は重要。日本で、「街の音楽家」は、昔から女性が優位であったわけではない。1970年代以降に定着した現象。また、1980～2000年はアップライトピアノと実月収が均衡しており、それ以前も、それ以後も、ピアノは実月収よりも高い。

⇒「[過剰に]富裕」(馬場宏二)であった日本の再貧困化は、今後のピアノ文化にいかなる影を投げ掛けるか。いま一つ、少子化の影響は？

⇒裏返すなら、①19世紀末～20世紀前半の多産社会からの少子化過程と、②高度経済成長と、③都市勤労者の実収入の上昇との複合的な産物としての日本の戦後のピアノ文化。近代(滝廉太郎)～戦前のピアノ文化(意識的に獲得された文化)との相違・断絶。

(2) 聴き取り調査の情報の豊かさ

母から娘へ、さらにその娘へと相続されるピアノ文化

⇒男女によって意識的に獲得された文化から、女系の相続文化への転換の開始が、およそ1960年頃(1950年前後に産まれた女性は、母親の夢・希望に沿ってピアノを習得するようになったの)だとすると、それから二世代が経過して、いまも安定的に継承されているのか。若年人口の減少以上に縮小していないか。あるいは、ピアノ文化への新規参入の回路は維持できているのか？

(3) 女系相続文化としての特質

近世以来の、下層より上の未婚女性の習い事・嗜みの伝統。

箏(「お琴」)からピアノへの連続的な変容。変容以前は、三味線・太鼓(鳴り物)や尺八ではなかったし、変容以後もギター・エレキギターやハーブではない。

おそらく、一人当たりGDP水準の上昇と、箏からピアノへの変容は並行している。

⇒対象は変わっても、女系相続という特質はなにゆえ継承されたのか。期待される娘の像と母親の像。

⇒では、近世以来の日本で未婚男性の習い事・嗜みは何であったか、いまは何か？

武道から学問(「お勉強」)へ？

あるいは、男系相続文化はそもそも存在しなかったか？

(4) 近代の女系相続文化のもう一つの特質

家元制度、「～道」。華道、茶道、「ピアノ道」。Cf. 19世紀後半イギリスの「ティー」ピン札の「お月謝」、「発表会」、ふさわしい衣装と華やかさ。音楽外的な要素による修飾。

II 松本彰「鍵盤楽器の社会文化史——「音律の世界史」と西洋近代」について

(1) 西洋近世～近代の音楽史的特質

鍵盤楽器の多様な発達＝演奏者が自ら発音物に接しない唯一の楽器群＝発音原理(管(閉管、開管)・弦・打)による区別を越えた「鍵盤楽器」という概念の成立

＝人と道具(楽器、instrument)の関係という点では、発音原理ではなく、操作方法が大きな意味を持つ。

からくり仕掛けとの同型性、古典古代以来のメカネー、テクネーの伝統の延長上の、しかし、近代産業文明の産物としてのピアノ。あるいは、より広く、西洋の楽器は、機構を複雑化して、音色と音高を標準化する方向に進化した(現存する例外としてのヴィオラ族の弦楽器とリコーダー(ブロックフレーテ)、それ以外は近代産業以後の楽器改良・改変の産物)。

鍵盤楽器の決定的な不利：瞬時の調律・調音が不可能⇒調律の基礎となる音律の規定性が極めて大きな意味を有する唯一の楽器群→(2)。

(2) 西洋近世・近代音楽の音響学的な進化の方向性

①響きの美しさ(純正調)を犠牲にして、転調の自由度と移調前後の響きの不変性を追求。なぜ、響きの美しさではなく、転調・移調を求めたか？

七音音階の上で三度和声に基礎付けられた調性音楽かつホモフォニーの便利さと不自由。主要三和音の上で旋律を転がせば、とりあえず音楽は成り立つが、それだけではいかにも単調で、飽きる。→変化の必要性：変化はポリフォニック(≒対位的)にではなく、転調の自由度と、音色の異なる多数声部(究極的には管弦楽)と、大規模な演奏者の方向に進んだ。なぜか？

②おそらくは、西洋近世・近代音楽の中での鍵盤楽器の特殊な位置(多声部を一人で演奏できるから、作曲・編曲・教育に便利)によって、鍵盤楽器の不利を避ける方向に音律は進化した。

純正調オルガン・ピアノの実験の失敗。極端な転調 一半音上下、限5度等々ー を想定しなければ、中全音律(≒ミントーン)が実用的。いまでも、オルゴールの調律はミントーンが主流。

しかし、「極端な転調」の実用性が証明されてしまうと(18世紀末、ソレールのチェンバロ・ソナタやF. J. ハイドンの晩年のピアノ・ソナタ変ホ調におけるめまぐるしい転調と半音上(ホ長調)への到達)、中前音律では対応できず、平均律が採用されざるをえない。J. S. バッハの"wohltemperiert"の再解釈の重要性。今後の研究が俟たれる領域。

平均律の実用化は18世紀前半(J. S. バッハの存命中)か、18世紀後半(C. P. E. バッハ、A. ソレール、ハイドン、シュターミッツ、そしてモーツァルトや若き日のベートーヴェン)の時代か？

③東洋の諸音楽と比較した場合の西洋音楽の特質

響きの美しさと転調・移調の自由は、トルコ、アラブ、インドのように微分音(「半音」

より小さな音の隔たり。四分の一音、八分の一音、九分の一音)を意識的に採用すれば、ほぼ確実に解消できるし、実際にトルコ音楽はその方向に進化したのではなかったか？ ジェム・ベハール／新井政美訳『トルコ音楽にみる伝統と近代』（東海大学出版会、1994年）。

とはいえ、トルコもアラブもインドも、近代西洋音楽のような大規模な音楽は創造しなかった。なぜか？

大規模音楽の需要という問題。

(3) 鍵盤楽器の西洋音楽における特殊な位置の20世紀的状况

第5のクラヴィーア("Klaffünf"?)としての電子的発音鍵盤楽器(ハモンド・オルガン以降の電子オルガン、電子ピアノ、いわゆる「キーボード」)。

元来はオルガンやピアノの代用楽器ないし練習用楽器であったが、「オルガン」や「ピアノ」といった元の名を捨てて、単なる「鍵盤」になることが、ポピュラー・ミュージックに果たした意味も、20世紀の「市民音楽」を考える際に無視できないのではないか。

Cf. 電子的なギター(エレキ・ギター)や低音撥音楽器(エレキ・ベース)

20世紀的な産業文明が提供した20世紀的大衆音楽の道具的(instrumental)基盤。

テルミン(ソ連起源の電子楽器)が普及しなかった理由。

Ⅲ 「市民音楽」の歴史と現在について

ヴァルトブルクの歌合戦(『ニュルンベルクのマイスタージンガー』)における市民音楽は歌(と、そこに表現された「ドイツ精神」)。

歌から、器楽の合奏へ。そこから、ピアノの独奏・連弾へ。

一人当たりGDP水準上昇との相関。

現在の「市民音楽」は？

ゲーム・ミュージックの重要性。現在の可搬型の「総合芸術」